



国際化の最前線から

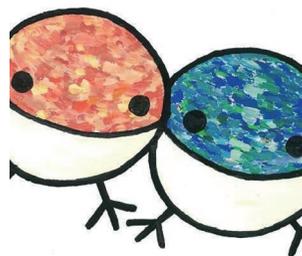


ひろがれ「共生の地域づくり」

大阪大学大学院人間科学研究科付属未来共創センター 特任教授 榎井 縁

1990年初め入管法が変わり、外国人流入の時代の幕開けに、大阪のベッドタウンといわれた豊中市に、国際交流協会と市の施設である国際交流センターが設立された。それから四半世紀たった今、目にする風景は、多様なルーツの子どもや女性たちが安心していられる拠点である。日本の公的施設は誰にも平等に開かれているが、外国人にとっては敷居が高い。学校では声がだせない子どもが、家では暴力を受けて逃げ場のない女性たちが、ここなら大丈夫とほっとする場。本来持っていた力を取りもどすことをエンパワメントというが、息の長い活動はその言葉に集約されている。ほぼ毎週行われる「市立図書館での外国人と日本人の親子の交流活動」、「日本語をキーワードにした多様な交流活動」、「子どもたちのたまり場・母語・学習支援活動」、「若者の表現活動」、「多言語の外国人女性と臨床心理士による相談活動」などは、500人にも及ぶ市民ボランティアを中心に運営されてきた。教育委員会と協働で市内全小学校に外国語体験のための外国人ボランティアを派遣する事業も13年目になる。

シンボルキャラクターのコモとスースは対話し社会化することの象徴で、ステレオタイプ的な「各国の文化」を飛び越えている。“外国人”は社会の産物であり、そのことで生きづらくなならないようにと集う人は実感し、活動は継続されてきた。



コモとスースは、“コミュニケーション・コモン・スペース”という「ぼづくり」「ひとづくり」の空間から命名されました

2019年4月、30年ぶりに入管法が変わり政府による「ワンストップ型相談センター」構想が提案された。多言語で一元的に相談ができる発想は大いに評価できる。ただ相談「する人」「される人」が固定化されないよう

な地域社会がまず検討されるべきではないか。いつのまにか混在し、時には立場が逆転し、新しい空間が生まれるというカオスのような活動はきっと各地に芽生えていることだろう。



地域のイベント庄内キッズフェスティバルにも参加して、みんなでフリーマーケット出店しています

災害時に外国人が頼ったのは、日本語ボランティアだったことが証明するように、信頼できるのは「ことばが通じること」ではなく「顔の見えるひと」なのだ。新たに



みんなで七夕飾りを作って飾りました♪

たくさん入ってくる不安を抱えた人たちの声にならない声拾える場が、網の目のように全国にひろがること（=共生の地域づくり）が今望まれている。

注 公益財団法人とよなか国際交流協会は2019年3月にその活動をまとめた『外国人と共生する地域づくり 大阪・豊中の実践から見えてきたもの』（明石書店）を発行しています。

プロフィール

榎井 縁 (えのい ゆかり)

大阪大学大学院人間科学研究科付属未来共創センター特任教授。大阪大学大学院人間科学研究科後期博士課程単位取得退学。博士（人間科学）。公益財団法人とよなか国際交流協会理事。同協会職員として長年活動する。現在、多文化共生を牽引する研究者かつ実践者の教育に携わる。大阪大学未来共生プログラム：<http://www.respect.osaka-u.ac.jp/>